

LingvoオクトM+

2024年6月10日

(月曜日)

姫路あいめっせ4階3会議室

6月例会

○詩

○川柳

○エッセイ・小説



今後のオクトM+の予定

6月10（月）姫路あいめっせ

読書会講師：情野千里

テーマ

日本のシンデレラ物語

落窪物語を原作とした「舞え舞えかたつむり」

田辺聖子作とその周辺になります。

予定7月8日（月）姫路市民会館

読書会講師：海埜今日子

8月はお休みです

世話人高谷和幸

〒676-0815 高砂市阿弥陀1-11-24

e-mail takatani_kk@yahoo.co.jp

読書会をしていただく方を探しています。
自薦、お受けします。

しろやあきのり

誰かは知らない家から匂う、料理の匂い。心に浮かぶ仲良し家族。

そういう瞬間が日常にふと差し込まれる時、幸福を感じる。

なんでだろうな。

その匂いは、人間にとつての基本的な幸せが目一杯表現されているような気がする。

家族かあ。

寂しいな。

羨ましいな。

いい匂いだな。

でも、帰らなきゃ。

お腹を空かせた僕が待っている。

【逡巡】

世界の有りと有らゆる不幸を私という存在と照らし合わせる。

想像も出来ないほどの不幸にも、仮初めの。

共に生きようとしているのか、依存しようとしているのか、どちらかわからない。

しかし一応、確かな答えを掴んだ振りをしている。

そこで返まっている事を仮に正解と呼ぼう。

停滞。じつとする。じつとしか出来ない。なぜかはわからないが、

そうせよという心の声が聞こえる。

この世の一切は無駄かもしれぬ。

でも、ニヒリズムとは違うような気がして。

モヤモヤモヤモヤ、分らない。

最初の一步がわからなくもあつて…

逡巡。

カンロ カンロ

吉田ふみゑ

頬の内側はべーろべろ

ほらほら

見て見て

瘤が出来たよ

カンロ カンロ

あまーいよだれが糸を引く

右の頬はニツキ味

左の頬はショウガ味

あめ玉ジュースが喉を通ると

大きな瘤は小さくなって

消えていく

カンロ カンロ

頬の内側はべーろべろ

瘡はすっかり消えてしま
い
あめ玉包んだセロハン
は
蝶々になつて
飛んで行つた

不在の わたしに

内田 正美

柔らかい玉のようだ
形のない膜につつまれて
うすぐらい闇のなかを漂っている
響きあう音に光を見て
ニューロンに電子がはしる
膜の柔らかさから異次元へ滲みでる
はじまりでもなく
おわりでもない
楽しんだり、苦しんだりしている
光の方へ 未生のものへ
電子（こころ）をはしらせる
そこにしか、わたしはいない
はじまりはない
おわりはない
かぎりのない波だ

夢のなかでたちこめていた霧は不意に凝縮しはじめ、人の形となつて、男の姿になる、時がゆっくり流れ始めた、男はリュックを背負い、電車を乗り継ぎ仕事へ向かう、車窓からの風景がスピードをあげて流れている。

幸せの方程式

浜田多代子

幸せとは

すべてのことに

満ち足りて

心穏やかであること

辞書より

初老の先生は

演題に幸せの方程式と書いた

背中をしゃんと伸ばし

幸せの定義を述べる

高齢者に教えようとする言葉の束

エアコンが効きすぎ

肌寒い講堂

三百人近く

XとYの生き方とか

幸せ感を聞いたとて
これからの人生が変わるものかと

講義の音が

遠のいてゆく

モンシロチョウの飛び交う景色

子供たちが道を歩いて行く

ピンク色のレンゲ畑

畦道にはタンポポの黄色

おかつばといがぐり頭の子供たちは

レンゲの花の中へ

滑るように潜り込む

弾ける笑い声がする

幸せの定義なんて

誰も知らなかったが

いつも顔は輝いていた

墓石に入る相談

高谷和幸

痲つた低気圧が部屋に充滿している 霧のよう
な無用なものかも 布団と 横たわった身体の
軋みから抜け出て 夜が明けるカーテンの光の
隙間からコトンと音がして石が落ちた よく見
ると亡父だった コトンと 音がしてわしは降
りた わしは失われた人格 せきに止まるな
せきに止まるなとつぶやく もはや誰でもない
ものが 光芒とした 川の水の流れの震える波
動を見ておる その顔は 何年かぶりに見る
顔だな いや初めてお目にかかるやつかも知れ
ぬ 腰にさしたるものを抜いて 抜けた鋼のた
ましいは わがみから 天湖へと 宙に架かつ
た階 光る瑕から あさぼらけに隠し置かれた
ものとの境界に住むが 見えない なんぼ尋ね

でも おらばこそ と答えるばかり 慢性的人
格不全とこやつがぬかしおって 庭のこかげに
おるもの 床下にかくれたふるいものたち お
らばこそと これまで親子で連れてきたものが
うぬ と語りかけてくる 今こそ違うぞとは言
えないのだ たくさんの亡者の先祖が川を流れ
る 男たちも女たちも ここではそれも石ころ
だと亡父 濁りおりて 頭の中が詰まりきって

失恋と因果応報

モス堀渕敬子

私は、昭和53年の4月、大学4年生の授業が始まる直前に失恋した。相手は同じ大学の3年生で、桜の花が満開の時に呼び出されて夙川堤で別れを告げられた。

英会話学校のESSで知り合って、あまり付き合っただけという実体はなかったのに、その後の喪失感は今まで経験のないものだった。それまでは片想いで何度も失恋していたが、それとは比べものにならない位のつらさだった。「君とは友達として付き合い合

うつもりだった。」と言われたが、彼からは、ゼミ旅行のお土産としてペンダントをもらった。女性にアクセサリーを贈るとするのは特別なことではないのか。初めて彼ができた、と私は舞い上がってしまった。

しかし、私のここが嫌だった、あそこが嫌だったと言われ、ひどく傷ついた。もう混乱してわけがわからなかった。

それからしばらくして、彼が高校時代の彼女とヨリを戻したと、他のメンバーからきかされた。2人は付き合い合っていたけれど、彼女が、東京の大学に行くことになって一旦別れたようだ。しかし、彼女が休みを利用して帰省した時にヨリを戻したので、私が邪魔になったのだろう。

私が振られたのは、私に彼を引き留めるだけの魅力がなかったからだろう。しかし、本当のことは言わずに、私を責めるだけだったのは本当にひどいと思う。私は2年ほど

立ち直れなかった。

ある日彼女に言われた。「堀渕さんとは、話しがしたいと思っていた。回りの人からいろいろ言われる。」と。どうやら、彼女がいない間、彼と私が付き合っていたと誰かから言われたようだった。しかし、私は失恋に打ちのめされていた時だったので、彼女と話す気力はなかった。

それから3、4年たったころだろうか。大学馬術部の同期の友達が先輩と結婚することになって、宝塚ホテルに行った時のことだ。ロビーで、彼女がお父さんと一緒にいるところに出くわした。結婚式場を探しに来たと言う。そんなところに出くわしてしまったのだ。

しかし、結局2人は結婚しなかった。共通の友人にきいたところ、「彼は私にはずつと誠実だった。だけど他の人に不実なところを見てしまった。」と言っていたそうだ。彼は婚約破棄されて傷ついたことだろう。しかし、人にしたことは自分に返ってくるということだろうか。

その後、彼女はさっさとお見合いして、さっさとその人と結婚してしまった。それからしばらくしてESSメンバー同士の結婚式があつて出席した。その時私は31才でまだ独身だった。

彼も招待されていたと思うが来なかった。彼女は妊娠7ヶ月の大きなお腹をかかえながらも出席していた。しんどそうだったが幸せを撒き散らしていた。

それから大分たつてから彼が亡くなったときいた。まだ50代だったと思う。

亡くなった人の悪口は言うべきじゃないかもしれないが、因果応報という言葉の意味を考えてしまう。

黎明

灰色の空が白んでいくのを
眺めている
静謐な朝

やがて灰色から白に
白から青に変わって
くちぎれた雲の下を
綿のような雲が通っていく

イソヒヨドリが一羽二羽
窓をかすめて
隣の屋根に移っていく

ボルヘスが愛した

諸井 学

チェスタトンの短編集を開く
幸せの朝

*たぶんいかなる作家も、チェスタトンほどに
私に多くの幸福な時をあてがってくれはしなかった。

ボルヘス編集「バベルの図書館」①

『アポロンの眼』G・K・チェスタトン（国書刊行会）序文

犬犬訳西洋紀聞補遺 4

千田草介

(承前)

話はさかのぼるけども、わいが江戸に来て白石はんと顔を合わせるにいたるまでのことに触れておかんと、どんならんな。わいはイタリアのシチリア島でいちばん大きな町パレルモの生まれ。親父の名はヨハンニ・シドツチ、おかんの名前はエレオノーラ。わいは四人兄弟の三番目。いちばん上の姉は幼くして死に、次は兄貴でフリリッポ。末っ子の弟は十一歳で死んだ。

わいは聖職をめざす道に入って二十二年間学び、ローマで司祭になって、伝道師の使命を帯びることになった。法王様がわいに示された行き先が日本やった。わいは、そう、この国でいうところの武者ぶるいやな、震えましたがな。いや、恐ろしいというよりも感激の方が大きかった。なんせ日本というたら、あの聖フランシスコ・ザビエル師がおとずれて彼の地を大天使ミカエルに捧げ、初手の伝道をなさったところや。わいはそれから三年間、ひまさえあれば日本について風俗や言葉の勉強にはげんだ。ザビエル師以来、ルイス・フロイス師や巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーノ師らが書いてよこした報告書や手紙なんかがヴァチカンの文書庫には

どっさりおましたさかいにな、なんぼでも日本についての勉強はでけましたんや。もちろん、日本がきびしいキリスト教禁教政策をとつとることは、わかつとりましたけどな。法王様は、どうかして日本の支配者に掛け合うて、禁教をゆるめさせられんものかとお考えやつたんや。

さて、いよいよローマをあとに東洋へ向けて出発しました。わいのほかもう一人の宣教師、トーマス・テトルノンがいつしよで、彼の行き先は北京でした。ジェノヴァで船に乗り、大西洋へ出てカナリヤ諸島でフランスの船に乗り換え、フィリピンのルソン島に着き、ここでテトルノンとは別れました。わいはそれからマニラに四年、滞在しました。マニラはむかし日本から追放されてきたジェスト高山右近ちゆう、元はたいそう勇名をとどろかせた武将の信徒が昇天なざつたところだす。ここでわいは日本へ行く準備をし、渡航の機会をうかがいましたんや。

(つづく)

垂涎抄・源氏物語―帚木(上)

瀬川健二郎

は、き木の心を知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな (源氏)

と、宣へり。女も、さすがに、まどろまざりければ、数ならぬ伏屋におふる名のうさに

あるにもあらず消ゆる帚木

「帚木」は、ホウキグサの別称。信濃の園原にあつて、遠くから見るとあるように見えるが、近づくとき形が見えないという伝説の木から取っている。

情愛があるようにみえて、その実体はない。姿はあれど会えないことを示している。この帖全体は、「雨夜の品定め」として有名であり、さまざま女性の実態を描いているようにみえるが、実は、架空であることを、あらかじめ暗示している。

※

女の、これはしもと難つくまじきは、かたくもあるかな、と、やうやうなむ見給へ知る。たゞうはべばかりのなさけにて走り書き、をりふしのいらへ、心えてうちし、などばかりは、随分によるしいきも多かり、と見給ふれど、そも、まことにその方を取りいでむ選びに、必ず漏るまじきはいとかたしや。我が心えたる事ばかりを、おのが

じし心をやりて、人をばおとしめなど、かたはらいたきこと多かり。

まず辛辣に女性を暴く。「非の打ち所のないような女は居ないと分かる。ただ、うわべだけの風流(こと)で、手紙を達筆に書き、応答をうまくするぐらいは沢山いる。けれど、本当にその技能(うで)を選び出すには甚だ難しい。そのくせ得意なことを自慢して、人を見下すのは見ておられない」

そして、女性の本質を知らない男性に忠告している。「容姿もすぐれ、おっとりした若い女が、ちよつとした芸事も人真似で身を入れれば、いつしか立派に一芸を仕上げらるだろう。周りに仕えている人たちは、その女の不得意な点を隠していわず、まあまあ見られる所を言葉飾って吹聴する。そこで男は、本当かなと思つて付き合つていくうちに失望してしまう」

引用・参考文献(1)玉上琢彌訳注『源氏物語』角川ソフィア文庫

(2)瀬戸内寂聴訳『源氏物語』講談社文庫

「うつし世もゆめも」連載 14

菊花の浮かぶよ、命なりけり、いしぶみにへルンさん

海埜今日子

（うつし世はゆめ、夜の夢こそまこと）。江戸川乱歩は、そう好んで書いた。わたしはこのうつし世と夢の狭間に居続けたいと思っている。なぜなら、どちらもまことで夢だから。

（年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり小夜の中山）。西行法師のこの歌を十代の頃に知った。爾来、心のなかにいしぶみのように残っている。普段は水底のようなどろに沈んでいて、ふと、場所たちと再会した折などに、それは浮かび上がってくる。思いがけず、また来ることができた。ああ、命なりけりだなあ。以前の場所と、今の場所たちの狭間で、水にぬれた歌が、いしぶみから聞こえてくる。西行法師が六十九歳の時に詠んだというのに、と、その度に自分の年齢（最初は十九歳だった）を思い起こし、だいいち「小夜の中山」にも、行ったことがないのに、いいのだろうか、ためらいのようなものを覚えて苦笑するのだけれど。波紋はそれでも、心のなかで、あたたかかった。

四月に出雲・松江に車で小旅行をした。住んでいる兵庫県・播磨からは、瀬戸内の海から日本海へ、山の多い道を突っ切る感じだ。三十年ほど前にも東京から飛行機で行った。その時は、なぜ出かけたのだろうか。ただ水辺を求めてだったような気がす

る。稲佐の浜、宍道湖、松江城のお堀たち。二回目は、連れ合いが神話や古墳時代に興味があったから、出雲大社、遺跡、そして小泉八雲、ヘルンさん。

今住んでいる加古川。名前は随分前に上田秋成『雨月物語』の「菊花の約」ではじめて知った。〈播磨の国加古の駅に丈部左門といふ博士あり〉。丈部左門は、出雲松江生まれの赤穴宗右衛門が、病に伏しているのを助け、それが縁で義兄弟の契りを結ぶ。ここに加古や出雲が出てきた。今度の旅行で、山陽から山陰へ抜ける途中、月山富田城の名前を見た。赤名宗右衛門が仕えたのが富田城主塩治掃部介だった。そのほか、標識だったかで、城主を亡ぼした尼子氏由来の地名も見かけた。年たけて、初夏の緑たちがつぶつぷと明るい。山たちを車で通りすぎながら、水に濡れたいしづみを感じていた。そういえば、加古川に住むことになったときも、「菊花の約」とともに浮かんだなあと思ふやうと思う。

一回目の旅行は松江中心、今回は出雲中心だったからか、西行法師の歌、いしづみは、行く前に思っていたより、浮かぶことがなかった。旅の最後に駆け足で松江付近を巡る。宍道湖で、少し、水底からいしづみが昇ってきた。塩見縄手、松江城近くに残る武家屋敷跡に来たとき、それは圧倒的なものになった。お堀の水が濃い緑を、遅い午後の光でちらめかせている。コサギが水際に静止画のように立っていた。過去の景と、今のそれが、わたしを貫いて、重なり合う。浮かび上がったいしづみは、思いがけず、わたしを時間の中で、あるいは外で、再会させてくれたのだった。コサギが何か

に驚いたように、羽ばたき、堀の水すれすれに飛んでいった。ああ、自宅から十五キロほどの所にある姫路城は、別名が白鷺城だったなど、またふうわりと今に戻る。心のなかで波紋が余韻として、ながく残った。それはやさしい、おおむね明るい水面だった。そして旅の最後にヘルンさんに会いに行った。

塩見縄手の一面に小泉八雲記念館と旧居がある。ラフカディオ・ハーンの「hearn」の読みが「ヘルン」に近かったとかで、特にこの辺りでは、今も親しみをこめてそう呼んでいる。英訳版『古事記』、出雲神話に惹かれ、松江・出雲に来たそうだ。彼は幻想と日常、失われてゆく何かたちの声を、聞き取り、残そうとする。盆踊りが、盆に帰ってきた死者とともに踊る祭りなのだと、改めて教えてくれたのはヘルンさんだった。歌声の中、踊る人たち。着物の袖が蝶のように舞っている。〈現に若い娘たちが捲き上げているこの埃は、かつてこの世にあった人たちだった〉（『神々の国の首都』「盆踊り」）。

一度目の旅では訪れていなかったもので、そうした意味ではいしづみは浮かんでこなかったが、遺愛の品々を見たり、旧居の畳を踏む中で、読んだ本の世界と重なって、やはり、年たけて……と歌が響いてきた。それは、うつし世と夢の狭間をぬらす水でもあったかもしれない。命なりけり。

マレーシアから孫が来た

情野千里

マレーシアには行ったことが無い。1992年にインドネシアと韓国の二カ国海外ツアーを手始めに、タイ、サンフランシスコ、フランス、イタリア、ロンドン、オランダ、ベナン、トーゴ、エクアドル、ポーランド、ギリシャ、台湾、ベトナム、メキシコ、チリ、中国、ニューヨーク、フィンランド、スウェーデンと、延べにするとおよそ50カ国をツアーして来たが、長男の哲也が〇歳、三歳、五歳の孫・理人を連れて里帰りして来ただけで、私はマレーシアへ行ったことが無い。この夏、長女の久美が十四歳の孫・琉人の語学留学（短期の）に同行しろと言う。次の前書きのタイトルは「マレーシアへ孫と行く」になるだろう（たぶん？）。

卓袱台がおおきにおおきにと歩く

七つ向こうのお山の猿が名付け親

算盤持ってペダンチックな付喪神

ひとり悲しむプラスチックゴミ回収日

ウイスキーは好きです地雷踏むまでは

妄想力で走る自動車査定額

実をつけぬ花も花なり腹踊り（ドヤサア！）

売りはらう亡母が踊りに来る家を

亡弟三人くんずほぐれず蝮踊り

ばあちゃんばあちゃんばあちゃん五歳が連呼する

2024年6月10日（月）LINVOオクトM+6月例会のために

